

# 藝術立国

— 北の大地から、平和を希求する大学をめざして —

東北芸術工科大学  
理事長 徳山 詳直

この大学は、悠久の大河最上川をつつんで、  
蔵王連峰、出羽三山、朝日連峰に囲まれる  
日本文化の源流、縄文の奥深い土壌の中から生まれた。

この東北こそ、日本に残された最後の自然―母なる大地―である。  
現代文明の過ちを克服し人間の尊厳を取り戻す戦いの砦である。

大学創設の原点に立ちかえり、十五周年を期に新たな教学体制のもとに再出発を遂げて、一年が過ぎようとしています。

この一年は、まさに、我々の大学の見事に成長した姿を世の中に示すと同時に、新たな課題を再確認できた節目の年でした。

―東北芸術工科大学は、東北・山形という立地を最大限に活かし、大学の外延を地域や社会に向けて大きく広げ、全国的に見ても存在感のある大学へと成長を遂げてきた。

―どこまでも地域に密着し、地域に慕われ、地域とともに歩むことこそ、大学の生きる道であり、東北芸術工科大学は、まさにそれを実践している。

―芸術で重要な直感を学問へと育て上げ、いかに世の中の理解を得るか。それが芸工大「第二ステージ」の課題だ。

寄せられた声は、我々の立っている位置を明らかにしてくれました。

わが大学設立の理想は「東北ルネサンス」の運動に結実し、東北の大地から発して「日本の藝術立国」に到る道を指し示す、光となりつつあります。

こうして、闘うための基盤は整ってきた。その上に、次の新たな闘いをどう展望するか。我々の芸術運動を、東北から日本全体へ、さらには東アジアから世界へ、いかに広げていくか。

省みれば開学から今日に至るまで、二十世紀から二十一世紀へと移り変わる激動の時代でした。ベルリンの壁が崩壊し、東欧に民主化革命が起こり、ソ連が崩壊して世界の冷戦構造が終わりを告げました。しかしそれでも、地球上に平和は実現されませんでした。

中東やアフリカなど、多くの地域で民族と宗教の闘争は激化の一途をたどり、二〇〇一年には、あのニューヨークの事件が起こり、そしていまなお、世界中で戦争と殺戮が繰り返されています。

この間、人口の爆発的増加による貧困と環境破壊は急速に悪化し続け、人類の生存を脅かしています。一九九〇年に五三億人であった世界人口は、二〇〇六年には六五億人に達し、さらに十五年後には八〇億人を超えると予測されています。

地球資源の消費量において、一四億の人口を擁する中国が、先進国・米国を上回りました。その中国をはじめ、二〇三〇年には世界最大の人口となるインド、さらにその他の途上諸国が米国並みの生活水準に達したとき、地球はいったいどうなるのか。

地球が養うことのできる人口は、発展途上の生活レベルで九〇億人から一〇〇億人と試算されており、明らかに人口の爆発は地球の許容量を超えつつあります。

人類は、叡智を結集して、環境破壊をくい止め、貧困を根絶して幸せを得るか。

それとも地球の資源を消費し尽くし、戦争と殺戮を繰り返しながら、滅亡への道を辿るか。

これからの三十年は、間違いなく、人類の生存を決することになります。

そう考えるとき、我々がいま進めている芸術の運動にこそ人類の未来がかかっている。「戦争と平和」、「戦争と芸術」の問題をどこまでも訴え続けていこう。これまでもそうであったように、これからもこの道を一筋に進んでいこう。そういう決意が、改めて沸々と湧きあがってきます。

一、東北から日本を照らす芸術運動をめざす

暮らしを豊かにするはずの科学技術の進歩が、地球を破壊していく現実。

幸せを追い求めながら、憎み合い、殺し合う、人間の愚かさ。

その矛盾した世界の中で、

縄文の豊かな土壌に育まれた精神を、新たな世界観へと結集させることができるか。

科学技術に侵された人類の文明を、芸術的創造によって再び人間の手に取り戻せるか。

繰り返し語ってきたとおり、それが、わが大学の命題です。

(ア) 「東北学」の新展開

東北文化研究センターは、東北の大地に埋もれた叡智を掘り起こし、新たな民族史の可能性とその現代的意義を問い、さらに東アジアのなかの日本文化の探究へと歩を進めてきました。その活動によって、我々の芸術運動の歴史的、思想的基礎ができてきました。

その「東北学」の成果を現代に生かしていくために、仙台を、東北の知恵と文化資源を集積して現代に問いかけていくための最前線と位置づけ、仙台スクールを「東北ルネサンス」をテーマとする文化交流拠点へと育てていきます。さらに、その新たな展開を「東北文化友の会」の活動とも重ねながら、東北から日本の再生をめざす「人と思想のネットワーク」を構築します。

(イ) 美術館大学構想——美と平和の拠点づくり

美を求める心、文化を大切にする心は、戦争をも阻止する。

そう考えると、芸術の果たす役割、教育の果たす役割は、いかにも重大です。芸術と文化こそ、国を救い、人間を救い、そして人類の未来を救う。わが大学が提唱する「美術館大学構想」は、まさにその道を歩んでいます。

大学キャンパスが芸術で埋め尽くされて、やがてそれが山形全体に広がっていき、この都市、この地域が、大きく生まれ変わっていけば、どれほど素晴らしいか。

その哲学を貫き通す大学でありたい。

そのために、「美術館大学構想」をさらに推し進めて「芸術工房村構想」と連動させ、廃校―芸術工房村―大学キャンパスを結んで、地域社会全体を「美と平和の拠点」とすることをめざします。

また、京都造形芸術大学と連携し、平和創造に寄与する美の姿を求め、「戦争と芸術」の問題を探究する芸術運動を、広く展開します。

(ウ) こども芸術大学 ― 母なる大地の再生

「こども芸術大学」の開学により、わが大学は、人間形成の基礎となる幼児期の芸術教育の第一歩を踏み出しました。今日のこどもをめぐる社会状況を見ると、こどもと母親のための芸術運動なくして文藝復興の更なる展開はありえないことが痛感されます。

「中南米やアフリカや、こどもたちが苦しんでいる国々に、この運動を広げてほしい。」在校生からそう要望されました。それが実現する日が必ず来ます。

まさに、こどもこそ未来。

二十一世紀、人類を救う一人になるかもしれないこどもたちの魂は、大いなる大地と母親の愛によって育まれます。

我々の芸術運動は、この母の愛と、こどもたちの魂とを大きく包み込みながら、ともに歩んでいかなければなりません。

京都造形芸術大学の「こども芸術大学」と連携して教育内容の充実を進め、その運動の全国への展開

をめざします。

また、こども芸術教育研究センターにおいて、こどもと芸術に関する探究を進めて原理と方法の確立をはかりながら、こどもと母親の教育にあたる若者の育成をめざして、より強固な展開をはかります。

### (エ) デザイン選手権大会——「創造力」による社会の変革

芸術を学ぶ若者に、人類危機の時代を克服しようとする強い意志をどう植えつけるか。

他者の痛み想像力を働かせ、多くの人々の幸せのために芸術の力を用いる姿勢をどう養うか。

困難な問題を解決し社会を変革する創造力をどう身につけさせるか。

すなわち、「芸術家魂」をもった若者をどう世の中に送り出すか。

文藝復興とは、文藝復興を担う人間の育成にほかならず、その教育こそが我々の大学の最も重要な使命であることは、言うまでもありません。

開学当時から構想した「全国高等学校デザイン選手権大会」は、いまや七二の高等学校から三〇七チームが参加するまでになりました。社会の矛盾や現代の諸問題の解決を競う高校生たちの真摯な姿、それを支える大学生たちの熱心な姿は、我々に大きな希望を与えてくれます。

人間がどうすれば幸せになれるのか。その問いから生まれたのが「デザイン」であったにもかかわらず、デザインという運動は必ずしも人を幸せにし得なかった。

日々の暮らしを良くするデザインだけではなく、世界の矛盾の中で苦しんでいる人たちの苦しみや悲しみに思いを馳せ、自分自身の苦しみや悲しみとともに、その解決を考えていくデザイン。そのような心のデザインを志すことが、今求められています。

この運動を日本の隅々にまで行きわたらせ、デザイン哲学の再構築をはかりながら、人間の「想像力」と「創造力」こそ人類の危機を克服する鍵であることを、強く社会に訴えていきます。

## 二、東北と京都を結んで日本の「文藝復興」をめざす

振り返ってみれば、敗戦後の焦土と化した日本を見て、民族の歴史と文化の源流をたどり、日本人の魂の故郷を明らかにすることこそ日本復興への道であると考え、大学創設を決意しました。

そして、日本文化の中心である京都に焦点をあて、その志を実践する新たな芸術文化運動を「京都文藝復興」と名づけました。

しかし、短期大学を発足させ、新たに大学をつくり、芸術と文化の運動を通して日本の魂の故郷を求めていくうちに、京都が日本文化の中心となる以前、日本はいかなる姿であったか、という疑問が湧いてきました。

果たして弥生の向こう側にあるものは何か。

その疑問に背中を押されて、東北の大地を歩き回りました。

そして、東北こそ日本に残された最後の「母なる大地」であり、現代文明の過ちを克服するための最後



の砦であると確信したとき、この大地に大学をつくり、東北と京都とを結んで、縄文から弥生に至る深い歴史の底から日本のあるべき姿を探索する運動をはじめようと決意しました。

それが、東北芸術工科大学の出発点でした。

東北芸術工科大学と京都造形芸術大学とは、それぞれ特色のある自立した運営をはかりながら、共通する理念のもとに連携して事業を行ってきました。

二〇〇〇年…単位互換制度を制定

二〇〇一年…東京サテライトキャンパスを共同開設

二〇〇二年…交換留学制度を開始

二〇〇三年…韓国事務所（ソウル市）の共同運営を開始

二〇〇五年…「こども芸術大学」を両校に開学

東北芸術工科大学「全国高等学校デザイン選手権」と京都造形芸術大学「世界アーティ  
ストサミット」との協力連携を開始

二〇〇六年…「東アジア芸術文化研究所」を開設（東北芸術工科大学、京都造形芸術大学、ソウル市・  
弘益大学の三校共同事業）

日本のあるべき姿を世界に向かって示していく道は、東北と京都、縄文と弥生の文化を一直線に結ぶ姿を描き出す運動にあると確信しています。

「こども芸術大学」の同時開校は、両校に共通する理念を鮮明に示しました。

山形から発して、東京の日本文化藝術財団や蓼科の康耀堂美術館を中継し、京都と結んで、全国に「美術館大学構想」の理念を広げていくことも夢ではありません。

東北芸術工科大学と京都造形芸術大学との二校連携による全く新しい大学運営の姿を示しながら、芸術による日本再生の運動を確実なものにします。

### 三、東アジアと連帯し平和をめざす

中国が世界政治において大きな影響力を発揮するようになってきました。その動向は、東アジアの中の日本の命運を決定的に左右します。

朝鮮半島では、世界を揺るがす事態が起こりつつあります。

昨年、北朝鮮は核実験を行って、世界中から非難を浴びました。しかし、考えてみれば、アメリカこそが世界最大の核国家です。しかも、人間の上に核爆弾を落とす経験がある国は、唯一アメリカだけです。そのアメリカは、いまなお一萬発の核弾頭を保有しています。世界中でロシア、中国、フランス、イギリスなど九カ国に合計約三万発、地球を三十回以上破壊することのできる核弾頭が存在するのが現実です。今またイランに触発されたアラブ諸国が、連合して核拡大競争に奔走しはじめました。

このとき、なぜ大国が核廃絶の先頭に立たないのか。

人間の愚かさが、平和を妨げ、地球を脅かしている。

そうした中で、中国はどう動き、日本はどのような役割を果たすのか。

東アジアの中の日本は、中国とどう向き合い、韓国とどう手を組んで、危機を乗り切っていくか。

その問題の解決を見出すために、京都造形芸術大学、韓国・弘益大学との共同により、「東アジア芸術文化研究所」が設立され、いよいよ活動を開始します。この活動には、延世大学や梨花女子大学など、韓国の他の有力大学が加わります。さらに中国とも共同していきます。

日本、韓国、中国をはじめとする東アジア地域の伝統及び現代芸術文化の研究、芸術文化の交流史研究、そして教員・学生間の実際の学術交流を通じて、人類危機の時代に、「東アジアにおける平和の問題」あるいは「芸術と文化による民族連帯の問題」に挑みます。

#### 四、芸術運動の理想と哲学を探究する大学

芸術の立場から「戦争と平和」の問題をどう捉えていくか。

この世界の状況をどう認識するか。

その理想と哲学を学び伝えることが、基本です。

理想なくして大学は存在できず、また、依って立つ哲学なくして芸術の運動は存在しえません。

美とは何か。愛とは何か。

人間とは。そして、生命とは――。

もう一度繰り返しますが、闘うための基盤は整ってきた。その上に次の新たな闘いをどう展望するか。

いよいよこれからの闘いこそが、大学の死命を制することになります。

ヨーロッパ・ルネサンスが起こった時代、世界の人口は、わずか四億人でした。地球は無限であり、人間の可能性も無限だと信じられた時代に、ルネサンスの運動が展開され、人間を万物の至上におく近代へと続く歴史の基礎となりました。しかしいまや、地球は有限であることが明らかになりました。

我々の「文藝復興」は、近代を支えた「ルネサンス」とはまったく似て非なるものです。

地球は有限であるという認識を基盤に、芸術と文化による人間精神の復興と世界平和をめざす新たな運動こそ、我々が提唱する「文藝復興」の運動なのです。

芸術とは何か。

芸術は戦争を抑止できるか。

芸術は地球上から貧困を根絶する力になるか。

芸術は人類の新たな救世主たりえるか。

「平和を希求する大学」としての旗幟を鮮明にし、後続く世代を信じて、命のある限り闘っていく決意を新たにしています。

二〇〇七年新春

わが大学の前に道はなし。

あるは、歴史の実験のみ――。